

大阪信愛女学院短大 ○渡部 由美 前田 佳子 垣本 充

- (目的) 子供の味覚嗜好の形成は、家族の影響、特に父親や母親の味覚嗜好と、それに基づく食品の摂取体験に影響されると考えられる。そこで、甘味と酸味の異なる2つの味覚について、親の嗜好が子供の嗜好にどのように関与しているのかを調べるために、幼稚園児とその父母に、甘味と酸味の各種食品について嗜好調査を行い、味覚嗜好の傾向と、親の嗜好との相関を検討したので報告する。
- (方法) 幼稚園児(男児87名、女児80名)とその父母(各167名)を対象に、甘味を有する食品、酸味を有する食品それぞれ20品目について食品嗜好調査を実施した。それらより、各食品について、嗜好度の平均値及び標準偏差、相関係数を求めて有意差検定を行い、親との相関について検討した。
- (結果) 1. 甘味、酸味ともに、嗜好度は年齢による差が大きく、幼稚園児と父母との間に、嗜好度の平均値に1%の危険率で有意差が認められた食品が多かった。
2. 幼稚園児の甘味食品の嗜好度は、チョコレート、アイスクリーム、ケーキなどの洋菓子では高い値で好まれていたが、ぜんざい、ようかんなどの和菓子の値は低く、あまり好まれていなかった。
3. 幼稚園児の酸味食品の嗜好度は一般的に低い値であったが、柑橘類をはじめ、果物のように酸味はあるが糖度の高いものは好まれた。
4. 甘味、酸味食品ともに、幼稚園児では、男児と女児の嗜好度の差はほとんどないが、父親と母親では、嗜好度に性差が認められた。
5. 甘味、酸味食品ともに、子供の性別に関係なく、父親よりも母親に強い相関がある食品が多く、調査した食品の半数以上が、5%及び1%の危険率で相関があると認められ、幼少期においては、食事を担当する母親の嗜好が子供の嗜好に大きく影響すると思われる。